



北の大地にはもうひとつの……

関川 太郎†

Eureka! Different in the North

Taro SEKIKAWA†

11月中旬(2021年)に広島東洋カープの監督を務めた古葉 竹識氏の訃報に接した。小学生の頃、日本シリーズの手に汗を握る試合を観戦し、知将のイメージを持っていた。球団の経営事情のため必ずしも有望な選手を採用できない中、厳しい練習で選手を鍛え、緻密な采配で強いチームを作り上げた。カープ監督を退任後、その手腕を買われ大洋(現・DeNA)の監督を務めたが、残念ながら在任中の成績は芳しいものではなかった。広島でのイメージがあったため、当時、私はとても意外に感じた記憶がある。訃報に際しての新聞の評伝には、厳しい練習に耐え抜いたものだけが生き残るというやり方が通用しなかった、とある。あるチームには当てはまっても、別のチームでは必ずしも効果的ではないことはよくあることである。1987年にヤクルトで活躍した大リーガー、ボブ・ホーナー氏の著書「地球の裏側にもうひとつの違う野球があった」に取り上げられているように、ルールは共通でも、日米で共通の価値観を持つとは限らない。

プロ野球チームと同じように、大学や会社ごとにカラーがある、というのは、多くのレーザー研究の読者に同意していただけるだろう。野球における優勝という明確な目標達成のための方法でさえ、様々ある。大学は教育と研究が主目的であり、会社は収益の最大化であろう。しかし、大学関係に限っても、良い教育や研究は何か、という問いに、すべての読者の間で共通認識を持つことは難しい。目標自体に多様性があり、同時に教育対象の学生が教育に対して求めることが大学によって違う、からである。

過去何十年にわたる教育改革が一向に収束しないのは、時代の変化もあるが、それ以上に目標と手段の多様性を無視し、一つの理想像を追い求めるからであろう。教育については一億総評論家といわれるほど様々な意見が交錯するが、個人的体験に依拠した言説が多く、万人に当てはまるわけではない。教育制度を設計する人たちといえども、その呪縛から逃れることはできていない。大学で働いてみると、制度設計者の周辺には「出来の良い学生」しかいないのだから、と推察される。「ゆとり教育」が必ずしも機能しなかったのはその例であろう。かつて研究所勤めの友人に、学生への対応の難しさを話したことがある。現在彼は大学に勤務しているが、今ようやく私が言っている状況が理解できた、と言っていた。

ということで、筆者の経験を記しても一般的な知に昇華することは難しい。しかし、筆者の周辺の学生が教育に求めるものが以前とは変わってきていると感じる。現時点の教育のスナップショットとして書き残しておきたい。

プロ野球選手は、練習し自分の能力を高めなければ生き残れない、という共通の価値観は持っていると思われる。それでも厳しい練習に対する見解は割れている。ましてや学生の価値観は多岐にわたっている。何時からかは判然としないが、私の周囲の大学院生は、研究活動は教育課程の一段階に過ぎない、と明確に意思表示するようになった。要するに、就職に直接結びつかないので厳しい練習は不要だ、ということである。本音はともかく、大学院生は研究内容に関心があって進学する、のが今でも建前であるので、筆者には衝撃的であった。しかし、その時々学生の気質と折り合いをつけながら研究と教育を行うしかない。

学生の関心とのミスマッチを小さくするよう、現在、積極的に学生に学会発表や論文執筆の経験を積んでもらうようにしている。これは少々背伸びであるが、私の周辺の学生にとって、厳しい練習を経て試合出場を勝ち取る、というのは魅力的ではない。学生は進歩を体感できる一方、筆者の狙いとしては、他大学の学生の姿を見てほしい、ということである。仲間内だけでは澁んでしまう。違う世界、価値観があることを知って欲しい。レーザー学会学術講演会にもその機会の一つとして参加している。また、これまで、ほぼ全員の修士論文の主要結果を学術雑誌に共著者として公表しており、相応の貢献をしてもらっている。読者の中には、学生が研究発表を行うことは当たり前のこと、と思われる方もいると思う。しかし、大学の在り方も多様であり、筆者の周辺では学術雑誌での公表に至ることは稀のように見受けられる。それなりの労を取る必要がある。ただ、大事なことは、個々の学生にとって良い教育か、ということであろう。

†北海道大学大学院 工学研究院 応用物理学部門(〒060-8628 北海道札幌市北区北13条西8丁目)

† Department of Applied Physics, Hokkaido University, Kita 18 Nishi 8, Kita-ku Sapporo, Hokkaido 060-8628

論文が公表され、歴史に名が刻まれた、と喜ぶ学生もいる。研究への関心を高める効果があることは確かである。

古葉監督は晩年、大学野球の監督を務めている。身体的にプロに劣る学生をどの様に指導したのか。残念ながらその記録を見つけることはできなかった。プロでの経験がどのように活かされたのか、興味をもたれる。